


 ふひょう いちどう
 浮萍 一道 開く

- NPO法人ホップ
障害者地域生活支援センター

代表理事 竹 田 保

今年には寒暖の差が激しく、桜の開花も早くなると思っていたが、最近、ようやく開花し、満開の地域が話題になっている。桜の開花とともに、新年度も始まり、今年、ユニバーサルタクシーの拡大普及やライドシェアの導入によって、車いすを利用する人の外出がよりアクセスしやすくなるのではないかと期待している。しかし、まだまだ公共交通機関や社会全体がユニバーサルデザインの理念に基づいて配慮されているとは言い難い現状があり、私も電動車いすを使用する日常生活を送る中で、様々な困難や課題に未だに直面している。

コロナ禍以前に会議で北京市を訪問した際に、ウーバーのようなスマートフォン配車アプリを利用し、車いす用タクシーを利用した経験思い出した。その時の利便性には驚かされた。待ち時間はたったの10分程度で、指定先から目的地までスムーズに移動することができた。日本では、ユニバーサルタクシーを簡単に利用することはもちろん、即座に呼び出すことはできないが、このようなユニバーサルデザインが実現された移動手段が、身体的な制約を持つ車いすユーザーにとっていかに重要かを改めて痛感した。

最近、新聞に掲載された記事によれば、東京都内でタクシー会社が主導する「日本版ライドシェア」が4月から解禁され、タクシー不足の時間帯に限定的に運行されることが明らかにされた。新たなサービスは、タクシーが不足する時間帯に、一般ドライバーが自家用車を使って有料で客を運ぶものであり、タクシー会社が加盟する東京ハイヤー・タクシー協会が主導し、政府関係者も出席する出発式が開催された。このライドシェアサービスの展開には、ユニバーサルタクシーの普及やユーザーの利便性向上の

期待が寄せられています。と報道されていた。

一方で、公共交通機関でのアクセシビリティの課題も依然として存在する。先日、北海道外から来られた車いすユーザーの友人が、入院中の友人のお見舞いの後に、病院近くのバス停から地下鉄駅までの路線バスを利用しようとした際に、暗に乗車拒否に近い対応をされたと聞いた。病院近くのバス路線には移動困難な車いすユーザーの利用も多いと思うと今後の接遇向上を期待したい。

日本国内でもITの発展・普及に伴い、スマートフォンアプリの導入が進んでいる。運輸分野における個人の財・サービスの仲介ビジネスに係る国際的な動向・問題点等に関する調査研究によれば、「全国タクシー」、「kmタクシー」、「モタク」など、様々なアプリが存在し、これらのアプリは、時間・運賃の予測や決済のキャッシュレス化などによる利用者の利便性向上に貢献し、さらに、流し営業時の空車時間の縮減など、タクシー事業経営の効率化にもつながると予想されている。

2017年8月から10月にかけて、これらのアプリを用いて事前に運賃を確定させるサービスの実証実験が行われた。タクシーに乗る際の運賃不安を払拭し、アプリの普及を促進し、タクシーの空車走行を減らして生産性を向上させることが狙いで、実証の結果、約7割の利用者が「また利用したい」とし、その理由として「値段が決まっていて安心である」と答えている。また、配車アプリを活用したサービスは若年層を中心とした新たな顧客層へ訴求すると考えられる。

このように、スマートフォンアプリの活用により、タクシー利用の利便性が向上し、新たな顧客層の獲得にも貢献している。そして、ライドシェアの解禁やユニバーサルタクシーの普及により、電動車いすユーザーを含めた、より多くの人々が安心して移動できる社会の実現に向けて、一歩前進するようになって欲しいと思う。モビリティにおけるユニバーサルデザインの理念を基に、より多くの人々が社会参加できるような環境づくりが進められることを期待している。